

岐阜県支部だより

- 巻頭言
- 支部研修会報告
 - ・第3回研修会
 - ・第4回研修会
 - ・第5回研修会

巻頭言 教育相談を学んできて ～小泉英二記念賞をいただいて～

日本学校教育相談学会岐阜県支部理事 小笠原淳

昨年8月に、小泉英二記念賞をいただきました。私のような者がいただいてよいのか、数か月経った今でも自問することがありますが、いただいたからには、これまで以上に、精一杯頑張っていきたいと考えています。

私がこの学会で教育相談を学び始めたのは、岐阜県で全国大会が行われた前年の平成24年度からになります。小学校に3年、中学校に3年勤め、3校目の学校に勤め出した時でした。その当時は「私は、子どもの気持ちに寄り添って頑張ってきた」と自負をもっていたと思います。教育相談を学んできた今、当時を振り返ると、自惚れていたことを恥ずかしく思います。

教育相談を学んできて、大きく変わったと思えるところは2つあります。1つ目は「聴く」ことができるようになったことです。若い頃は、子どもからの相談があったときに、一生懸命話している途中で、解決方法が見えたらすぐに、こちらから話をしてしまっていました。子どもの話を聴いていなかった残念な教師だったと思います。今は、話を最後まで聴くことができるようになりました。そして、話せるまで「待つ」ことができるようになりました。さらに、「どうしたらよいと思う？」と子どもに考える時間を与え、自己決定を促すこともできるようになりました。まだまだ足りないところはあり

ますが、昔に比べれば、聴くことができる教師に少し近づくことができているかなと思っています。

2つ目は、子どものことを考えられるようになったことです。例えば、登校を渋る子どもに対して、昨日何かあったかな？友達との関係はどうだったかな？学習面ではどうかな？家庭環境は？体調は？その子を支えられる人は誰かな？どんなことならできるかな？・・・といった感じで、多面的・多角的に考えられるようになったことが大きく変わったと思います。決め付けが減って、少しは子どもの気持ちに寄り添えるようになったと思っています。

もちろん、専門的な知識や様々な理論も学ぶことができましたが、何より教師としての構えを変化させることができたのが、教育相談を学んできてよかったと思えることでした。

「人の気持ちは分からない。だから、人の気持ちを分かろうとすることが大切だ。」この考え方は大学生のときからずっともち続けています。この考え方は、教育相談を学んでいく中で、さらに強くなりました。「子どもの気持ちに寄り添うこと」は本当に難しいと今も感じています。岐阜県支部で学び続けることを通して、「子どもの気持ちに寄り添うこと」の実現に少しでも迫ることができるようにしたいです。

☆支部研修会報告☆

◇第3回 研修会

開催日 : 2022年10月22日(土)
実施形式 : ハイブリット開催
会場 : 美濃加茂市生涯学習センター

◎全体会 14:00~14:10

1. 理事長あいさつ
2. 夏の研修報告

◎講話 14:30~15:30

「一人一人に寄り添う支援」
～美濃加茂市あじさい教室(適応支援教室)
の実践例～
教育支援センター主任相談員
西村 公孝先生

この講話では、「一人一人に寄り添った支援」とは、児童生徒をどのように見立ててどんな目標を立てるのか。また、そのためにどんなメンバーでどのように関わっていくとよいのかといった支援の方向性を、具体的なご実践を基に分かりやすく教えていただきました。

まず、「あじさい教室」のねらいとして①エネルギーを蓄える場所②自己肯定感を高める場所③家庭・学校との連携の3つを挙げられました。そして、このねらいを支援者と本人が共有することが、支援の方向性を導くためにとても大切であることが分かりました。

もちろん、このねらいに即して運営も行われています。あじさい教室の1日は、9:00~15:00(月・火・木・金)です。午前は、学習タイム、午後は、人間関係づくりタイム(運動・共同活動①農園②調理実習等)です。水曜日は、チャレンジ day として空けてあります。どの時間帯もその日のカリキュラムを自分で決め、子どもたちが無理なく自主性を育むことができるように考えられていました。

次に、学校や地域との連携の在り方について

教えていただきました。

「週3回学校出席」「部活動参加」の目標をもつA男を支えるには、学校との連携がとても重要になります。この実践では、本人・母親・教頭・学級担任・教育センター・あじさい教室相談員のメンバーで、復帰に向けた話し合いの設定がなされていました。

さらにそこで、A男本人が「めざす目標」と「そのために頑張ること」を自分自身の言葉で語る場が設けられていました。



このように「一人一人に寄り添う支援」をご実践しておられ西村先生ですが、今後の課題として、やはり連携の重要性を挙げて見えたことが印象的でした。

連携をするには、筋道を明確化することが大切であり、

- ① 役割分担
- ② 情報共有
- ③ 見届けと

サポート

について、できることは何かを学校と調整していく必要があることを教えていただきました。

(文責：木村 由紀)



◎座談会 15:30~16:15

今年度より新しく、参加者の皆さんによるフリートークの時間を設けました。これには、近況報告や相談事などを交流できる場、他の学校・業種の方とのつながりをもつ場にしていただけたらという願いがあります。

グループは、事務局でランダムに組ませていただきました。初めての試みのため、話すきっかけづくりとしてアイスブレイクからスタートしました。初めはやや緊張の面持ちがありましたが、10分くらい経過すると、会場全体が和やかな雰囲気になり、笑い声に包まれました。

実際に参加した方からは、次のような感想をいただいております。



【座談会の様子】

- ・ アイスブレイクが楽しかったです。その後のフリートークも大変有意義でした。同じ悩みを抱えている先生方もいると知り、また頑張ろうという意欲をもちました。
- ・ 今困っている事例を話し、貴重なアドバイスをいくつかいただきました。まだまだやれることがあるんだと感じ、早速実践したいと思いました。
- ・ 専門性の高い先生方とお話ができ、勉強になりました。
- ・

◇第4回 研修会

開催日 : 2022年12月10日(土)
実施形式 : ハイブリット開催
会場 : 岐阜大学附属小学校

◎全体会 13:30~13:45

1. 理事長あいさつ
2. 第3回研修会報告

◎事例研究会 13:50~15:00

「相談室登校をする生徒への関わり」
(中学校教育相談担当)

相談室登校をする中学2年生の女子生徒について、インシデントプロセス法を用いて事例検討を行いました。

インシデントプロセス法とは、インシデント(実際に起こった出来事)をもとに参加者全員が事例提供者に質問し、出来事の背景や原因となる情報を収集し問題解決の方策を考えていきます。インシデントを共有することで参加者も事例に関わる者として問題の解決策を考えるた

め、積極的に事例研に参加できます。

初めに、検討事項として「外部機関との連携」「校内でできる支援」「保護者へのアプローチ」の3点を確認しました。そして、提供された情報と参加者による質問から出てきた情報を黒板に書き出し、可視化した後にグループ討議に入りました。

グループ討議では、本人への支援の在り方について、「本人の状態(社会性のスキルが弱いなど)から外部機関や専門機関と連携し、本人を多面的に捉える」「本人の強みを活かした支援を学校全体で共有し進めていくこのことが有効ではないか」という意見が出されました。保護者への支援の在り方について、「保護者との信頼関係をよくするために学校での相談役を決め相談活動を続けていった方がよい」「保護者の話を聞く中で、本人の困り感や将来について焦点を当て、時間をかけて一緒に考えることを通して、保護者の安心感が得られるのではないか」という意見が出されました。

事例提供された先生からは、「これで良かったんだという確信と、さらに実践していきたいこと等が見つかりました。」と感想をいただきました。児童生徒の支援に携わる先生方が少しでも元気になって現場でご活躍できるような事例検討会にしていきたいと思います。

◎グループトーク 15:00~15:50

第5回 研修会

開催日 : 2023年2月18日(土)
実施形式 : ハイブリッド開催
会場 : 市橋コミュニティーセンター

◎全体会 13:30~13:50

1. 理事長あいさつ
2. 第4回研修会報告

◎グループトーク 13:50~14:20

◎学校カウンセラー講話 14:20~14:55

「年度末に向けて大切にしたいこと」

学校カウンセラー 郷田 賢先生

生徒指導提要が12年ぶりに改訂されました。新しい生徒指導では、「児童生徒の成長、発達を支える。」という考え方が強調されており、教育相談に携わる私たちにも大いに活かされるものです。

講話の中で特に印象に残ったワードは、「プロアクティブな生徒指導」です。改訂版では、問題の発生後に対応する生徒指導を「即応的・継続的（リアクティブ）な生徒指導」とし、日常的に問題が起こる前に行う生徒指導を「常態的・先行的（プロアクティブ）な生徒指導」と表現されています。そして、「どうすれば課題が起きないようにするのか。」というプロアクティブな生徒指導が重視されていると話されました。全ての児童生徒が対象となるプロアクティブな生徒指導は、ピア・サポートやSEL、エンカウンターなどを導入するなどして、計画的に実践できる場を年度末に共通理解しておくという良いと教えていただきました。

この他、「チーム支援」や「個に応じた指導の充実」など新しい生徒指導を実施していくキーワードについて分かりやすく説明されました。特別支援教育の視点から、リアクティブな生徒指導として、途切れない支援を実施していくための記録を残し引き継ぐことや、アセスメント（成功した手立て、うまくいかなかった要因など）をしっかりとした個別の支援計画を見直ししていく必要性を改めて感じました。

（文責：佐々木 文枝）

◎ 実践事例紹介 15:00～16:00

個別支援が必要な生徒への組織的対応

～絆づくり・居場所づくり～

関市立小金田中学校長 和田 誠司先生

学校教育目標「心豊かでたくましく生き抜く人間」をうけて教育相談の基本方針「可能性を信じる」をキーワードに不登校問題に取り組んできました。不登校の未然防止として①居場所づくり、②絆づくりを中心に掲げ、組織的に支援を行ってきました。①居場所づくりでは、誰もが過ごしやすい大切にされる学級・学校・ふるさとであること、②絆づくりでは、個別最適化された学びを選び、全ての生徒が活躍できることを大事にして進めています。学校・家庭・地域が願う子どもの姿を共有して子どもを認め励まし、個に合った支援をすることでよりよく生き抜く力を付ける。そんな場を作っていくことが重要と考えています。居場所づくり、絆づくりの場として、「小金田中学校ふれまち教室」を開催しました。子どもが自己決定し達成感を味わえる機会を今後も多く作り、誰もが安心して過ごせる学級・学校・地域を目指していきたいと考えます。

（文責：曾我部 恵美）

☆ 事務局より ☆

新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行され、with コロナの新生活が本格的に始まりました。岐阜県支部の研修会も参加人数を制限せず、対面での実施に戻していくことができそうです。しかし、コロナ以前に戻すだけでなく、コロナ禍で身に付けたオンラインと併用した実施方法は残し、コロナ禍以前よりも参加しやすい研修会を目指しています。また、新生活に求められる教育相談について学べる研修会も計画しています。加えて、今年度は夏季研修会で岐阜県支部30周年記念事業も計画しています。多くの会員の皆様の参加をお待ちしています。

（文責：事務局長 郷田 賢）

日本学校教育相談学会岐阜県支部会報第30号
2023年5月31日発行

発行：日本学校教育相談学会岐阜県支部
編集：日本学校相談学会岐阜県支部広報委員会
ホームページ：<http://jascg-gifu.net/>